

## FIAFスコピエ会議報告

A Report on the 70th FIAF Congress in Skopje

# 第一次世界大戦から100年を迎えて ——デジタル化の推進とアナログ技術の継承 大傍正規

Masaki Daibo

5月4日から10日までの七日間、第70回国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)会議が、マケドニア共和国の首都スコピエで開催された。本稿では、今回の会議について、シンポジウムでの議論を中心に、その概要を報告する。

## 念願のスコピエ開催

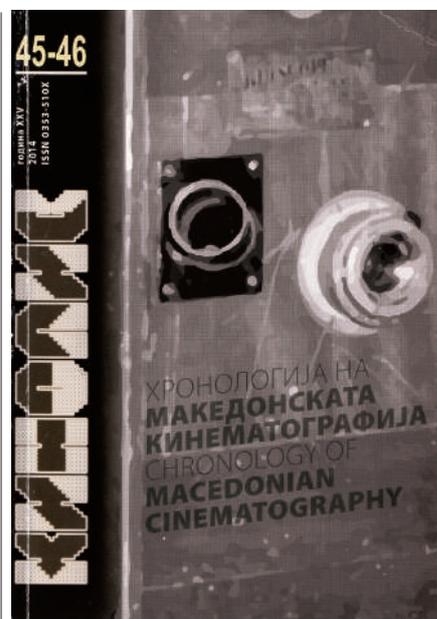
1991年にユーゴスラビア社会主義連邦共和国から独立を宣言するまで、バルカン半島の中央部に位置するマケドニア共和国は、コソボ、セルビア、ブルガリア、ギリシア、アルバニアといった国々に国境を接していることから分かるように、めまぐるしく国境線が更新される、南東ヨーロッパの要衝の一つであった。第一次世界大戦が勃発してからちょうど100年の節目にあたる今年、ホスト機関であるキノテカ・ナ・マケドニア(Кинотека на Македонија、図1-2)が、今回のFIAF会議のシンポジウム・テーマを「第一次世界大戦から100年を迎えて」(World War I - A Hundred Years on)に設定したのは、同大戦の先駆けとも言われる、1912年と1913年の二度にわたるバルカン戦争を経験した国として、避けては通れない道であっただろう。

キノテカ・ナ・マケドニアが今回のFIAF会議にかけた思いは——同館設立の根拠となった法律が制定されて40周年(設立自体は1976年)、FIAF会議70周年、第一次世界大戦100周年と

いった三つの周年が偶然にも重なった——同国で映画をはじめとする諸芸術の歴史、理論、文化を扱うジャーナル『キノピス』(Кинопис)45-46合併号(2014年、図3)が取り上げた、同アーカイブの二つのプロジェクトにはっきりと現れていた。その二つのプロジェクトとは、FIAF会議の開催にあわせて、①マケドニア映画史(1895-2014年)と、②キノテカ・ナ・マケドニアの歴史(1974-2014年)を跡づける年表を増補、改訂することであった。

かつて映画生誕100年の際に刊行された『キノピス』13号(1995年)においても、マケドニア映画史が編纂されたが、今回は近年の映画史研究の成果を取り入れることで、たとえ人口約200万人の小さな国であっても、豊かな映画文化が脈々と受け継がれていることを国内外に示したのである。実際、すでに1896年には、当時オスマン・トルコ領であったマケドニアに、リュミエールの映画が巡回興行者らによってもたらされていたし、1903年には、仏・パテ社や英・アーバン社のカメラマンが、同国での記録映画の撮影に乗り出していた。さらに1905年には、バルカン半島で最初に映画撮影をしたカメラマン、マナキ兄弟の兄ヤナキ(1878-1954)が、アーバン社製のカメラを購入し、マケドニア初の映画を撮影していた……。

このような知られざる映画史の発掘もさることながら、211名にのぼる会議参加者から最も祝福されたのは、これまで一部の人たちしか



▲図3:『キノピス』45-46合併号(2014年)

目にするのでできなかった、マナキ兄弟の全映画がデジタル化されたことである(図4)。マケドニアの日常生活、祝典、縁日の様子、民族舞踊、宗教儀式、風習等を大胆に切り取った全42作品、デジタル・データ(DCPおよびDVD)の再生時間にして64分もの、20世紀初頭に撮られた自国の映画遺産を持つ国が、世界中でいったいいくつあるだろう。その事実だけでも、キノテカ・ナ・マケドニアは、世界有数のフィルム・アーカイブの一つであると言えるのではないだろうか。今回のFIAF会議の開催にあわせて企画されたこのデジタル修



▲図1:キノテカ・ナ・マケドニアの外観



▲図2:キノテカ・ナ・マケドニアのフィルム保存庫

復の試みは、戦争の残影を今も抱えている同国の人々が、第一次世界大戦以前の自国文化の記憶を取り戻す良い契機となるに違いない。

それでは、具体的な会議の模様について、シンポジウム、映画第二世紀フォーラムの順に、その概要を報告していこう。

## FIAF会議シンポジウム

マケドニア独立闘争博物館で催された初日の華やかなオープニング・セレモニーを経て、5月5、6両日にわたり開催されたシンポジウム「第一次世界大戦から100年を迎えて」では、8つのセクション「第一次世界大戦映画コレクションのデジタル化とその管理(1)」「同(2)」「第一次世界大戦の表象:フィクションとドキュドラマのはざま」で「映画プロパガンダ」「1914年以前の戦闘の描写」「第一次世界大戦の撮影(1)特殊映画部隊」「同(2)バルカン半島」「同(3)ヨーロッパを離れて」において、計26の発表が行われた。

シンポジウムのテーマが「第一次世界大戦」を前面に押し出していたため、ともすれば欧米の研究者やアーキビストらによる発表に終始することも予想されたが、「1914年以前の戦闘の描写」や「第一次世界大戦の撮影(3)ヨーロッパを離れて」といったテーマでも発表を募っていたおかげで、蓋を開けてみれば、筆者の「1914年以前の戦闘の描写」(司会:岡島尚志)枠での発表を含め、アジアや南米からの発表者も散見された。

とはいえ、今回のシンポジウムでやはり特筆すべきは、最初の二つのセッション「第一次世界大戦映画コレクションのデジタル化とその管理(1)」と「同(2)」が取り上げた課題、すなわち、デジタル映画遺産の長期保管の問題を本格的に検討すべき時期にきた今、既存のフィルム・アーカイブがまとまった量のデジタル化された映画をアーカイブする決定を行った際に、どのような事態が生じるのか、あるいは、いかにして、そのための新しいデジタル・ワークフローを構築するのかという、今後ますます重要になってくる課題が議論の俎上にのぼったことであろう。ここでは、上記二つのセッションの6つの発表のうち、4つの発表が取り上げた「ヨーロッパ・フィルム・ゲートウェイ1914」(EFG1914)(URL: <http://project.efg1914.eu/>)の試みについて報告しよう。

デンマーク映画協会のトーマス・クリステンセンは、「ヨーロッパのアーカイブ、デジタル化を推進(EFG1914)」と題し、EFG1914プロジェクト全体の概要について発表を行った。

「EFG1914」とは、ヨーロッパ各国の第一次世界大戦に関する映画遺産を我々に届けてくれる「開かれた窓」のことを端的に指しているのだが、その目的は、2012年2月15日から2014年2月2日までの二年間をかけて、ヨーロッパの21のフィルム・アーカイブを中心とする全26団体が、①第一次世界大戦に関する総計661時間分の映画フィルム及び、5,000点以上の映画関連資料のデジタル化を行い、②インターネット・サイト「EFG」及び「Europeana」(URL: <http://www.europeana.eu/portal/>)<sup>2</sup>を通じてデジタル化した映像・資料へのアクセスを可能にする<sup>3</sup>とともに、最終的に①から精選した映像・資料を使って、③ヴァーチャル展覧会を開催することにあつた。

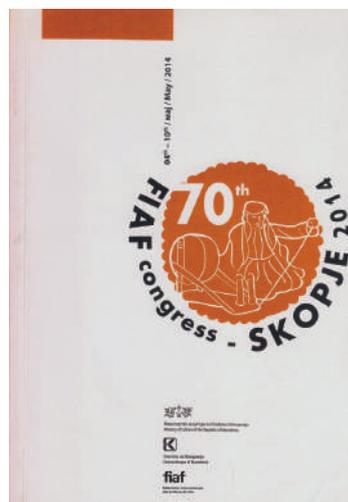
こうした目的を遂行するのに要したEUの資金は、総額400万ユーロ(約5.5億円)。限られた資金の中で、総計661時間もの映画フィルムのデジタル化を進めるには、やみくもに高解像度のデジタル・データを作成するのではなく、映画フィルムのスキャンング・レベル一つをとってみても戦略的に決定する必要がある。今回のプロジェクトにおいて、高価・高品質の4Kスキャンが全体の1%に抑えられ、比較的安価なHDスキャンが24%を占め、2Kレベルのスキャンが

全体の75%と突出しているのは、まさにそうしたマネジメントが的確になされていたからであろう(これだけ多くの2Kスキャンが行われたのは、ヨーロッパの多くのフィルム・アーカイブがフィルム・スキャナーを自ら所有しているという事情もあるだろう)。このようにして同プロジェクトは、2Kスキャンでのデジタル修復を中心とした効率的なデジタル・ワークフローを築きあげるとともに、様々なパターンのデジタル修復を行う過程でデジタルに関連する知識を蓄積しながら、映画フィルムのデジタル化に関する一つのスタンダードの策定に踏み出したのである。

映画フィルムのデジタル化が、このような形でより身近になる一方<sup>4</sup>、まとまった量のデジタル映画遺産をアーカイブ化することには、まだまだ解決すべき課題がある。つかの間の資金で作成した大量のデジタル原版を、誰がどのように長期保管していくのか(クラウド上に保管したり、オフラインのデジタル・メディア保管庫を建設する必要があるだろう)。あるいは、数年で陳腐化の避けられないデジタル保存媒体の定期的な媒体変換を誰がいつ行うのか。いずれも恒久的な資金が不可欠で、世界各国のフィルム・アーカイブが解消すべき共通の課題である。



▲図4: マナキ兄弟作品所収のDVDジャケット



▲図5: 第70回FIAF会議のカタログ



▲図6: EFG1914について語られたシンポジウムの模様

しかしながら、EFG1914に関連する発表を行った4人の登壇者たちからは、こうした後ろ向きの発言はなく、むしろ短期資金をくり返し獲得し、EFG1914の様なプロジェクトの経験を積み重ね、それらの情報をアーカイブ間で共有していくことで、やがて恒久的な資金が得られた際の準備を周到に進めているように感じられた。怒濤のように押し寄せるデジタル化の波を前にして、デジタル保存の危うさばかりに目を奪われていては、いつまでたってもデジタルの利点(あるいは欠点)が見えてこない。そして、映画フィルムは「フィルム」としてきちんと長期保存できる環境をしっかりと確保できているからこそ、EFG1914は一般の人々へのアクセス対応の拡充に専念できるのだ。

ヨーロッパのフィルム・アーカイブによるやや拙速とも思える急速なデジタル・シフトは、このような、したたかな戦略に裏打ちされた選択のように思える。それは文化遺産への保護が手厚いヨーロッパならではの戦略であるかもしれないが、今後フィルムセンターが所蔵する膨大な量の日本映画をデジタル化する機会が訪れた際に、同プロジェクトが一つのモデルケースとなることは間違いないだろう。

## 映画第二世紀フォーラム

会議4日目は、2002年から定例となっている「映画第二世紀フォーラム」と、3つのFIAC委員会によるワークショップや地域会合が開催された。今回の映画第二世紀フォーラムでは、FIAC加盟機関の間で映画遺産のデジタル化が推進される一方、「遺産と化したアナログ技術」(Analogue Heritage Techniques)をいかにして後世へ伝えていくかという、きわめて重要な課題について議論が交わされた。一口にアナログ技術と言っても、写真化学的メディアとしての映画に関わるあらゆる技術が想定されており、その中にはフィルム映写に関わる技術をはじめ、現像所が提供する様々なサービス(モノクロ/カラー現像、音ネガの作成、染調色作業等)が含まれている。映画フィルムのみならず、現像所等が持つアナログ技術を現時点で「遺産」と呼ばざるを得ないことに、日常的に現像所での仕事に立ち会う者としては、やや複雑な感情を覚えたものの、いまや当館においても本格的なデジタル・シフトへの備えとアナログ技術の継承は喫緊の課題であり、その意味でも英国映画協会(BFI)のウルリッヒ・ルーデル保存技術主任による発表「フィルム・アーカイビングの未来(FoFA)——デジタル時代にお

けるアナログ技術の遺産の保存」(BFIが主導して2012年9月に開催したFoFA会議の結果報告)の中で紹介された多くの提言には、認識を新たにする点がいくつも含まれていた。ここでは、①生フィルムのストック、②現像所、③スキャニング、④フィルム収蔵庫、⑤技術の移転と継承、⑥モノとしてのフィルムの多様な形態、⑦アナログ映写と関連機器といった7つのトピックをめぐる彼らの提言の中から、フィルムセンターの活動にも将来的に反映できそうなものを、紙幅の許す限り紹介したい。

まずは、①「生フィルムが今後いつまで確保できるか」といった課題については、フィルム・アーカイブと現像所が共同でフィルム製造業者に働きかける連帯的なアプローチを取る必要がある(現時点では、イーストマン・コダックの白黒、カラーのネガ・ポジフィルム、アグファのカラー、オルヴォの白黒、及び富士フィルムの長期保存に特化したETERNA-RDSが入手可能である)。また、生フィルムを低温低湿で長期保管した際に、どのような変化が見られるかをテストし、リサーチ・サンプルを収集しておけば、将来的に、生フィルムの大量購入をすることができるかもしれない。

次に、②「現像所が持つ技術の継承」の問題については、現像設備についての調査をはじめに、一連のフィルム・プロセッシング(現像、タイミング、プリント作業、フィルム映写)に関して記憶されるべき情報をきちんと残しておく事が求められる。また、アーカイブ内に現像所を設けることを促進し、友好関係にあるアーカイブをサポートする機能を持つことも奨励されていたが、まだ日本国内にはプリント作業のできる現像所が幸いにも3社存在するので、この点について本格的な議論を進めるには時期尚早であろう。

③の「フィルム・スキャニング」をめぐるのは、スキャナーメーカーと緊密な関係を築くことや、アーカイブ仕様のカスタマイズしたスキャナーを導入したうえで、まとまった量の映画フィルムをデジタル化するワークフローの構築を検討すべきである<sup>4</sup>。④「収蔵庫の質」の問題については、当館はすでに低温低湿に保たれたきわめて質の高い収蔵庫を保有しているので、今後は、既に収蔵されているモノとしてのフィルムの経年劣化に関する個別調査を進めるべきであろう。

⑤の「技術の移転と継承」の問題については、とりわけ現像所の経験と知識を若い世代に移転することが奨励されており、当館にあっては、

現像所のOBと若い技能補佐員とが協働する相模原分館が、その役割を果たしている。⑥の「モノとしてのフィルムの多様な形態」については、保存科学、写真の保存研究、写真化学、色彩科学といった科学者集団ないしは保存研究の専門家らとの関係を構築することで、映画フィルムのよりオーセンティックな復元が可能になるだろう。最後に、⑦の「アナログ映写と関連機器」の問題については、アナログ映写とデジタル映写それぞれの役割と妥当性についてのアーカイブ・ポリシーをはっきりさせることが求められ、今後は関連機器を製作している企業の維持に向けたサポートも必要であろう。こうした目的のために寄付を募るといった視点も重要である。また聞き慣れない言葉であったが、人間工学(人間の能力に作業環境を適応させる研究ergonomics)に基づき、フィルム検査から映写にいたるまで人に優しい作業環境を作っていくことも、フィルム映写を守っていくうえで、必要不可欠である。

## おわりに

今回のFIAC会議報告を終えるにあたり、5月10日に開かれた総会で、キノテカ・ナ・マケドニアの設立に携わったチェコフィルム・アーカイブ元館長のヴラジミール・オペラ氏が名誉会員に選出されるという、幸福な瞬間が訪れたことを付言しておこう。

(フィルムセンター研究員)

註

- 1 筆者はWar Films in the Far East: Cataloguing the War Films made before World War Iと題し、フィルムセンターが所蔵する第一次世界大戦以前の戦争映画(主として日露戦争関連映画)に関するカタログ化作業について研究発表を行った(詳細については稿を改めて公表する予定)。
- 2 欧州委員会が2005年に開始したヨーロッパアーカイブは、映画にとどまらず、絵画、書籍、写真等の文化遺産を横断的に検索できるポータルサイトであり、EFG1914以上に幅広い人々のアクセスを期待することができる。
- 3 シンポジウムの会場近くの映画館において、シンポジウムでの発表と連動した全22の上映プログラムが毎晩組まれていたが、35mmフィルムでの映写が行われたのは僅か7プログラムで、DCP映写が7、デジタル・ペータカムでの映写が4、ブルーレイ映写が4と、FIACが主催する上映会であるにもかかわらず、EFG1914の成果発表の場となったこともあり、今回は35mmフィルムでの映写が少数派となっていた。
- 4 会議4日目の技術委員会が主催するワークショップに招かれた、チューリッヒ大学映画研究所のバーバラ・フルッキガー教授による発表「DIASTORスキャナー・テスト」は、こうしたワークフローを構築する際に参照すべき研究である(詳細は次のURLを参照されたhttp://diastor.ch/)。カラー映画の歴史研究に強いアカデミックな研究機関とスイスの映画産業が協力して行ったこの共同研究は、DFT Scantity、Northlight、ArriScan、Lasergraphics Director、Kinetta、MWA Flashtransfer Vario、Golden Eyeといったスキャナーを用いて、スキャナーの光源の強さ、センサーの解像度、スペクトル感度、フォーカス、被写界深度、ソフトウェア(プログラミング)といった尺度でカラー映画の再現性を測るものである。しかしながら、そこから得られた結論が、①いかなるスキャナーもすべてのフィルムの要求を満たす事ができない、②人的要因のからむ、不確定な要素が多い、③スキャン・スピードと取り扱い時間に大きな違いがある、といったものに留まっているため、今後のさらなる研究の蓄積が必要であろう。